『青年ミヘルス研究(2)』

氏　家　伸　一

第2章　1902年：イーモラ

「イタリア社会主義運動の最初の総合的な著作」である『イタリア社会主義運動の批判的歴史』(1926) は現在でも充分に活用できるミヘルスの主著である。[1] そこでミヘルスは，イタリア資本主義の発展の特徴を以下のようにまとめている。問題意識は，イタリアの社会構造と民主主義が社会変革の「本質的な要因」をなしているか否か，にあった。社会主義的変革とその条件の分析がそのテーマとなった。方法は記述的で，分析は社会学的である。

イタリアの産業発展の第一の特徴は「工業生産の領域で生じた資本主義的集中」である。国家の保護によるプロイセン型の工業化の結果としてよく知られていることである。[2] 例えば1876年から1902年の間の機械化（紡績業界では4倍の増加）による綿紡績業の発展は顕著であった。この急速な工業化と近代化の「もう一つの兆候」として，ミヘルスはストライキの統計をあげている。

1879年32件→1889年126件→1899年259件

当然，参加者数も増えた。

1879年2,800人→1889年125,000人→1899年259,000人

またこの間の人口増加も著しく，1871年からの10年間に200万人，8.2%増加した。もっともその後20年間，1901年まで国勢調査が行われなかったが，その間に450万人15.85%増えたとされる。工業化に伴った都市化現象もみられた。都市化はイタリアの場合「国内移民」という側面をもっ

ていたことは周知に属する。大工場と「労働者の大群」の登場をミヘルスは二つの視点で分析している。

その第一は，いわば近代化（ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ）の引き起こした疎外の問題である。「1890年頃までは，イタリアの労働者と産業家との関係はある種の伝統的な思いやりと純朴さを特徴としていた。」(p.229) これが解体する。この変化は都市のみならず農村にもおよぶ。「カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスは，共産党宣言の中で次のようなテーゼを述べている。ブルジョアジーは権力を握ったところではどこでも，資本と労働力との間にあった封建的で家父長的で，牧歌的な関係をうちくだき，人間をその自然の優位へと縛りつけていた様々の封建経営的な絆を容赦無く引き裂き，人間と人間の関係としてはむき出しの利害と無味乾燥な現金支払いしかみとめられなくなった。」(p.230)

1890年代シチリアの暴動の原因もこの封建的関係の切断に求められるべきだとミヘルスは主張する。「封土」feude の廃止は，農民を「ただのサラリアート」にし，しかもその生活条件は悪化する一方だった。

このミヘルスの分析は一面的である。というのも，イタリア南部の社会（農業）問題の原因は近代化ではなく，その遅れ，むしろ払拭されていない「半封建的な制度」に求めるのが通常だからである。[(3)] ともあれ，ミヘルスの一つの視点ではある。イタリアの産業化に伴う第二の特徴としてミヘルスは資本主義発展の跛行性をあげる。「一般に，イタリアの産業発展はばらばらで，多くの面で偏った性格，つまり，ある特定の地域，ある特定の産業部門に特化するという性格を払拭出来なかった。」(p.230)

市場機能の不活発さが指摘される。結局イタリアの産業発展はイギリス，ドイツ，アメリカに比べて立ち遅れており，1882年から1902年の20年間，イタリアは依然として農業国だったとされる。

さて，この間のイタリア社会主義運動をミヘルスは「休戦のない戦い」

の歴史と呼んでいる。「労働運動は，法的にはその一日一日を生き延びる最低の保障しかなく，政治的には常にダモクレスの剣を頭上にさげられ，道徳的にはほとんど気にもとめられなかった。」(p.233)

しかし，1900年突然「新しい時代」が始まった。

今世紀初頭の10年間のイタリア経済は，政府の保護政策におおきく依存していた。特に軍需関係の重工業についてそれが言えた。一方，労働運動はというと，大企業でその組織化がおくれ，農土を手放さない労働者が多かった，という。分業と専門化に消極的であるため，イタリアの労働者は本来の労働者像にはほど遠かった。

1900年6月ヴィットーリオ・エマヌエルIII世が即位した。イタリアの支配階級の姿勢がそれとともに変わり，イタリア社会主義にとって「大躍進の時代」が始まった。(p.238) なかんずく，ジョリッティは社会主義に融和的で理解を示していた。1900年12月のジェノヴァのストライキ，イタリア最初の「ゼネラル・ストライキ」に際してジョリッティはこう演説している。

「長い間労働者の組織化を妨げる試みが行われて来ました。しかし，今や我が国の現状をよく認識する人達は誰でも，他の全ての文明諸国と同様にこのことは絶対に不可能であるということを確信するにちがいありません。……私達は歴史的な新しい時代の幕開けに立っています。盲目でない限り誰でもこのことを認識できるはずです。」(4)

一方の社会主義陣営の中でもそれに対応するかのように，改良主義が強く台頭してきた。改良主義の旗手トゥラーティは，この間の政治変動を「最も重要な議会革命」と呼び，それは「自由の確立と遵法の時代を告げるものであり，イタリアのプロレタリアートにとって発展の時代の条件であり，その前兆である」と評した。彼は社会党の「戦術」転換を強く求めた。改良主義者とトゥラーティにとっては運動の自由が「何をおいても守られるべきもの」であった。不測の騒擾の危険性はどうしても避けられねばならなかった。「政治権力の漸次的奪取」，「社会主義は

プロレタリア革命に先立つ」，というトゥラーティの「新しい政治理論」によれば，社会改良は，社会主義者が「政府とブルジョア階級」と協力してこそ可能である，ということを意味していた。

革命か改良かという修正主義論争はイタリアの社会主義者をも二分した。ジョリッティ体制の下のイタリア社会主義は「党内闘争」の時代でもあった。そして改良主義がはっきりと勝利をかちとったのが1902年，イタリア北部のエミリア・ロマーニャ州にある都市イーモラで行われた党大会であった。『イタリア社会主義運動の批判的歴史』の復刻版（1979年）への序文を書いたサッバトゥッチが，「本書を読みやすくし，楽しい気分にしてくれる」のは，その叙述が「生き生きしている」からだと評しているが，その例が「第Ⅴ部党内闘争，第1章イーモラ大会」である。以下その部分を引用してみる。

「イタリア社会主義の歴史においてイーモラ党大会は重要な位置を占めている。これは，イタリアの政治と祖国にとって切迫した利害関係のある問題が議論できた初めての大会であった。党は多くの試練と発展の中断の後に，充分に壮年の党に達し，新しい自由の息吹を堪能していた。イタリアの世論は大幅に変わり，もはや社会主義者を，陰険な陰謀家とか，危険なならず者とは見做さなくなった。多くのインテリは，過去に社会主義に敵対した人の中でも，社会党に関しては，むしろ善意の感情と利益関心によって鼓舞されていることを示した。しかし，大会は全く立派で厳粛なものであり，喜ばしいものであったともいえよう。2年前，王国の首都ローマでは，代表はかろうじて200人を数えたのだが，イーモラでは800人もの代表を数えた。イタリア全土から幅広く代表されたわけである。大会参加者を襲った喜びの感情をいやますのに貢献したのは，社会主義に魅せられた市民のこの上なく心のこもった歓迎であり，市長は申し分無く正式に礼を尽くした。

それを見た者の記憶から生涯消えることは無いだろうと，イーモラ大会の一目撃者は語った。マドンナの祭りの折りに，コスタ，バルバート，トゥラーティ，フェッリ，ビッソラーティなどのお歴々の話を聞くために市役所広場へと向かうイーモラの小奇麗な楽しい通りを歩いていく社会主義者，燃える

ような旗を掲げ，迫害されたが恐れられもした頌歌を歌ってあるく社会主義者，彼らの整然としかつ楽しげな一団には，無数の労働者が整然と従って行った。新しい戦いの準備の出来た新兵たち，訓練と戦いと勝利にとって貴重な勢力のすべてが存在した。労働者，インテリ，学生，農民，プロレタリアートそしてブルジョアジーが混じり合い，共に団結し，白昼公然と自由に振る舞えるということを誇示したのである。この行列には女性も入っていた。保守的で宗教心に富み，伝統と偏見に縛られた女性もこの若い集団に導き入れられ，誠実にそして情熱的に仲間に加わり，未来と，自分の子供たちの繁栄のために戦ったのである。イーモラの社会主義者たちの行列には，モリネッラの女性の農業労働者――彼女らのことは全イタリア人民が心を動かされて覚えている，というのも，彼女たちは，辛く不健康な，しかも僅かの恥ずべき賃金しか支払われない，長時間労働を強いられ，虐げられ，搾取されていたからである――も見られた。モリネッラの若者たちは胸に赤い花をつけ，腰や腕に花束をつけ，微笑み歌いながら，堂々と先導し，まるで，自分たちの人数よりも百倍も大きな数万人の力を代表しているかのようであった。……前へ進むと皆が彼女たちを讃え，道で立ち止まった人々は彼女たちを拍手喝采で迎えた。

しかしながら，牧歌的といっても，精通者の目にこの大会中に党が陥った由々しき状況を隠すことを意味するわけではない。潮流の戦いが猖獗を極めたのである。とはいえ，最も重要なすべての問題で改良派が大会でその意思を貫徹した。エンリーコ・フェッリとアルトゥーロ・ラブリオーラに代表される革命派は敗北した。多数派の対政府路線は大会で得票による厳粛な再承認を得たことになる。ようやく改良派はその新しい原理とその計画を実行に移す自由を手にしたのである。しかしながら，改良派の勝利は完全なものではなかった。

フィリッポ・トゥラーティは同志たちと共に党の執行部を直ちに解体するように提案した。というのもそれが古臭い制度の表明であるからで，それを3人の技術的職員よりなる管理・執行機関で取り替えるのはいうまでもなく，さらに，個々の組織の独立性で代えるべきとされた。この件に関しては，上から全党を統治しようというのは，ジャコバン的だといわれた。その代わり，この連邦制的考えの反対者の主張した最も有効な議論は以下のようなものであった，即ち，もし執行部を解体してしまったら，［国会］議員は唯一のしかも拘束されない主人となり，その結果，党が直接党大会を招集する機関が

なく，緊急の態度を決める必要が生じた場合は何時も，国会議員のグループが――たとえ，国会議員が同志ではなく有権者大衆から自らの職務を得ているとしても――従うべき指導の行動方針を決定する唯一の専決者となろう。これがフェッリ，ロンゴバルディなどの懸念であった。この問題での採決の結果執行部は維持されることになった。党組織では真の民主主義が存立し得ると仮定するなら，権力者が分離する傾向は，疑い無く反民主的であり，中央集権主義であり，大衆の意思に不可抗の有効性を与えるのに最も適した形式であるどころではない。この視角からすると，エンリーコ・フェッリが，改良主義者たちが望んでいる党執行部の廃止は，党員大衆の主権を殺すことに等しいと言って彼らを非難したのは正しかった。というのも，執行部はその権利を大会そのものから授けられており，大衆の意思を正当に表現しているからである，と。

社会主義者の団結はイーモラの大会で守られた。そして，これこそ，党への愛着が強く大きい社会主義の大衆，しかも，上の分裂をおぞましいものと見ていた社会主義の大衆――党大衆は，政治組織の究極の分裂はイタリア社会主義を無力にし，旧世界を再生させることになると考えていた――の大喜びの原因であった。イタリア社会党の中で団結の感情がいかに根づいていたかは，約3年の怨恨を込めた論争――これは時にまさに中傷の様相すら呈した――に，1904年ボローニャでラブリオーラと改良主義者たちの間でみられた感動的な場面が示している。即ち，フィリッポ・トゥラーティの演説の後に話始めて，ラブリオーラはこう本当に心配気に語ったものである。「というのもフィリッポ・トゥラーティが話している間，私と全く同じ調子で彼が語ったように感じたからである。そして，党と闘争との古参の同志を目前に見て，私の心に彼らに対する愛情が沸き上がるのを感じ，彼の言葉の中に私と同じ源泉の言葉使いに気付くにつけ，こう自問したのである。つまり，我々の間には，もしかしたら言葉の違いしか存在しないのではないか，と。……」

演説を終えたラブリオーラは，全員の賞賛を博し，トゥラーティ，クリショフ，トレベスらの拍手を受けながら演壇から舞台を横切ってもどった時は，どんな犠牲を払っても党の団結を保とうとする人たちの目に感動で涙が光ったものである。

イーモラの党大会はイタリアの社会主義運動の歴史において，はっきりと二つの顔を持った性格を持つであろう。これを長期にわたる酷い迫害の時代

がやっと終わった印と見た者にとってイーモラ大会は一つの輝かしい一点であり，目的地へと向かう道程で大きな区切りを画すであろう。イタリア社会主義の歴史をこのイーモラ大会で区切りたい人にとって，その意味は疑い無いものであろう。即ち，（戦いに倒れた者を）讃える儀式という意味である。そうではなくイーモラを，それを引き起こした年月との繋がりのみではなく，それに続く年月との繋がりでも見る者にとっては，その意義は様相を本質的に変える。その場合はパンドラの箱という意義を有する。つまり，そこから，長期間にわたりその眠りを妨げ，活動の時間すら台無しにして，イタリア社会主義に苦難を与えることになる邪悪な精神が跳び出したパンドラの箱なのである。」(p.251-255)

1. イタリア社会党（以下PSI）イーモラ大会についてはミヘルスは多くの報告を書いている。それらはドイツ社会民主党（以下SPD）の機関紙 “Vorarts”, “Scwabische Tagwacht”, PSIの機関紙 “Avanti!” に発表された。ミヘルスはこのイーモラ大会のみならず，1904年のボローニャ大会，1906年のローマ大会にも参加している。そしてイタリア人社会主義者の注目を引いたことを想像させる。イタリア人参加者の一人はミヘルスについて「その尊大な参加に仕方のために，彼は社会党大会の皆には不愉快な人物と映った。しかも，誰かれからの挨拶を伝えるという口実で，いつも思いつきの性急な判断を下し，我々の事に口出しをしようと，しつこく求めたためである。」しかし同じように口出しをする人たちの中で，彼は「我が国の事情を直接知悉している」と彼は付け加えている。(5)

1902年頃のミヘルスが既にイタリアの社会主義者と面識を持っていたことは事実であろう。就中，アルトゥーロ・ラブリオーラとエンリーコ・レオーネらサンディカリストたちとの「生き生きした交流」に入ったとミヘルスはその自伝的文書『ドイツ社会主義におけるサンディカリズム的底流（1903－1907)』で述べている。(6) 彼はこの1932年の論文で，サンディカリストとの交流により彼自身の反民主主義，反議会主義が強まっ

たと語っている。ファシスト＝ミヘルスによる，若きミヘルス＝サンディカリスト命題の捏造の疑いに関する問題については別のところで述べたのでここでは触れない。(7) ここでは，ただのこの同じ1902年から1905年まで，数多くの書評と論文を修正主義者ベルンシュタインの編集する雑誌“Dokumente des Sozialismus”に発表したという事実だけを銘記しておきたい。因みに，彼のイタリア語による処女論文「ドイツにおける社会問題」が発表されたのは，自由主義経済学者ルイージ・エイナウディの編集する雑誌“La Riforma Sociale”であった。

さてこのイーモラ大会はイタリア社会党の存在が欧州の社会主義者たちに関心を持たせるきっかけとなる大会であった。(8) Vorwärts に載ったミヘルス自身のルポルタージュは先ずこう書き出している。(N.19)(9)「我々ドイツ人にとっては喜ばしいこと」，「人々の感じた最初の嬉しい印象」は，イタリア政府が大会出席者に「旅行料金の特別割引き」を認めたことである。ジョリッティ体制の融和路線の一環であったか。

ミヘルスによれば，この大会で「二つの路線」が表面化し，前夜のうちにそれぞれが独自の会合をもっていた。改良派としては，トゥラーティ，トレーヴェス，カブリーニ，ベッツァーニ，クリショフ，ボノーミ，革命派としてはフェッリ，ソルディ，ベルテッリ，ラブリオーラの名をミヘルスはあげている。

第一日の大会では，イーモラ出身の最初の社会主義者国会議員アンドレア・コスタが開会を告げた。本大会はイタリア全土のジャーナリズムが注目していた。王党派の新聞でさえリーダーたちにインタビューをしていた。「イタリアの社会党が政治生活において決定的な役割を演じている」のみならず，この大会が極めて重要だからである。(N.20を参照)

議長の一人，C.プランポリーニは「党の内部組織」問題を提出した。それは，代表権の資格に関連していた。しかし，不問に付された，という。というのも，「そもそも，党の指導部からして，党が非常に大きく成長したこの数年の必要に適応していない」とミヘルスはコメントして

いる。党組織と党運営の関係に関する最初の発言である。

友党の挨拶状の中で，フランスのジョレスは三国同盟（ドイツ，オーストリア＝ハンガリー，イタリア，1882－1915）支持を求めていた。「フランスのショーヴィニスム」と「フランスとロシアの夢想」を打破するためであった。これに応えてラブリオーラがロシアの同志への連帯を表明する動議を提出，採択された。

言うまでもなく，この大会の中心問題は「社会党内に存在する二潮流の存在」と，党の団結・統一との相剋に関連していた。ミヘルスはラブリオーラに近いエットーレ・チッコティの発言を細かく紹介している。チコッティは先ず「そもそも大会というものは実践的な成果を目指し得るものなのかどうか」と疑問を呈した。何よりも潮流問題を解決すべきなのである，と。でないと他の政策にも取り組めない。「両潮流は根本的にはそれほど対立的ではないし，その代表たちも非常に性質が似た人達なのだから。両者とも改革を望んでいる。ただ，それを実現する方法が異なるだけなのだ。フェッリも次の点では一致している。即ち，プロレタリアートはブルジョアジーから改良を奪い取らねばならず，ブルジョアジーを助けてはならない，という点である。社会主義の価値が傷つくからというのではない。実践的な必要からなのである，と。しかし党の議会フラクションは原則として，政府に反対せねばならない。ただ例外的にのみ賛成投票できる。……議会フラクションは余りに妥協したために，しばしば損失を招いたと言わざるを得ない。」要するに，ジョリッティの融和政策の評価とそれへの対応が争点の背景をなしていると考えられる。そしてミヘルスはこの初日の大会の隠れたテーマにも注目していた。即ち，南部問題である。

「南部イタリアとそこの同志に対する北部の側からの反感のある発言」に対する非難，そして，南部におけるゆっくりとした改良よりも革命への指向性が強いという認識を紹介している。南部出身のマンドルフォは，「北部と南部の社会状態の違い」を強調し，「我々は社会革命を欲して

いる」と発言していた。

二日目の7日に本格的な論戦が始まった。労働者出身の議員で改良派のピエトロ・キエーザは，「今日の自由は守られねばならない。強力な組織を解散の憂き目に会わせるようなことは犯罪行為である」と発言し喝采を博した。ミヘルスの「党組織の保守的基礎」命題を端的に裏づける発言であった。

改良派の雑誌“IL TEMPO”の編集者トレーベスが「抑えがたい衝迫の時代は終わった」「説得による」「改良主義の潮流が唯一の正しい潮流である」と公言した。それに対し，ラブリオーラが興味深い反論をしている。改良主義は，イタリアの労働者階級には相応しくないというのである。というのも「イタリアの社会状態は外国のとは非常に異なる。イタリアのプロレタリアートは，決して成熟していないので，満足のいく改良を獲ちとることはできない。未だ低い段階にあるプロレタリアートの場合は，改良でもさほど実を結ぶことはない」と。ラブリオーラの反改良主義の理由は，改良主義者の君主制への「愛着」にもある。それは誤っている。「君主制の擁護をプロレタリアートはちっとも喜んでいない。」そして，ラブリオーラは「改良はなるほど，プロレタリアートの生活の一時的な改善の助けにはなるだろう。しかし，社会主義の最終目標にとって，相対的に僅かの意義しか有しないのだ」と結んでいた。

午後はデモ。ここでは有名なモリネッラの女性労働者たちの感動的な描写がなされている。「彼女たちははるばるやって来て，その可愛そうな状況のゆえに大きな犠牲をこのデモに捧げるのを厭わなかった。たとえ，そのために一日空腹であらねばならないとしても。」

市役所のある宮殿バルコニーから社会主義市長コスタをはじめ，党幹部が挨拶する。そして，「ドイツの同志，ロベルト・ミヘルス博士もコスタの求めに応じて，社会主義プロレタリアートの国際主義を祝して一言話す」と記している。

三日目に入って，いよいよ「党の戦術問題に最終決着をつけ」ねばな

らなくなった。それは，トゥラーティの演説でなされ，それをミヘルスは詳しく紹介している。要するに，トゥラーティによれば，フェッリやラブリオーラの革命派は，軍隊と軍国主義の廃止のような「政治的な改良」しか望まず，「社会・経済的な改良」を望まない，と批判された。「就中フェッリは，社会主義の最終目標をプロパガンダし，潮流の伝統を生み出した。改良主義者たちは，その反対者たちによれば，去勢された男と名付けられた。」しかし，「プロレタリアートは全く平和的な性質を持たねばならぬ」として，フェッリを批判する。「フェッリの革命理論は実践的には役に立たない。改良無くして社会主義無し」と。改良の具体例として，婦人と子供の労働保護法と離婚法をあげている。(10) ラブリオーラの主張する「君主制の打倒」をトゥラーティは無用無益と断ずる。フランスを例にして，「共和制が今日社会主義にたいしてメリットをもたらさないことは明白だ」と主張した。結局，トゥラーティは，社会主義者は「大袈裟な言葉を話すだけではなく，プロレタリアートの経済的教育に着手せねばならない」と革命派を批判した。といって改良派は「集産主義」という「最終目標」を放棄したのではないから，PSIには，二つの「潮流」が存在するのではなく，ただ「分業」が存在するだけと解した。党内闘争は「運動の全体」に損害を及ぼし，結局ブルジョアジーの利益となるからである。トゥラーティは結びで分派闘争の終焉を強く望んでいた。「我々の労働力と労働の勇気をもう一度とりもどして欲しい。我々の全生命を党員同士の戦いで朽ち果てさせているような状況から我々を救い出して欲しい。我々の本当の敵に対する戦いにこそそれを使いきるべきだから」と訴えた。

フェッリが最終演説でこれに反論した。「潮流は党の歴史的発展の当然の産物である」と主張した。そして，経済的改良路線が，政治的に保守的・体制的な傾向と結びつく場合として，「国王万歳」を叫んで虐殺されたシチリアの農民蜂起とボーア戦争を支持したイギリスとオーストラリアの労働組合をあげた。

大会はボノーミの妥協的な動議を採択した。「社会主義の最終目標は集産主義によって，資本主義の搾取から人民を解放することである。解放の方法とは，階級意識あるプロレタリアートによってなされる戦い，独占と生産手段の所有階級の経済的・政治的組織に対する戦いである。プロレタリアートの経済的・政治的・道徳的な改良を目指す改良はすべて，同時に，社会革命の達成に役立つので，二つの異なる潮流は全く統合できるものと見なすと大会は宣言する。――党の活動は，革命的であるが故に改良主義的であり，逆に改良主義的あるがゆえに革命的である，即ち，端的に社会主義的な戦術なのだ，と大会は宣言する。」

SPDは理論的には革命主義，実践的には改良主義という矛盾に陥ったが，PSIは，革命的な最終目標と改良主義的戦術との妥協の道を選んだ，と言える。しかし，両者とも組織の発展による戦術の保守化という点では共通である。この社会主義の独伊比較をしているのが，ミヘルスならではの論文「二つの大会――イーモラとミュンヘン」(N.22) である。

SPD代表としてミヘルス自身が参加したイーモラ大会の2週間後，ドイツのミュンヘンでSPD大会が開かれた。この論文は，先の論文がSPD機関紙の“Vorwärts”に発表されたのに対してPSIの機関紙“Avanti!”(1902年10月7日) に発表された。

第一印象としてミヘルスは，二つの大会が「さほど異ならず，むしろ根本では非常に似ている」と書いている。

ミュンヘンの大会は，例の穀物関税の大幅引き上げを含む新関税法案という重要な政策課題をかかえていたのに対し，イーモラ大会の中心テーマは二つの潮流の存在であった。ミュンヘンでは女性が活躍していたが，イーモラでは一人の女性も演台には立たなかった，とミヘルスならではの指摘がなされている。こういう対比の後，ミヘルスは，やはりミュンヘンでも潮流の問題が潜在していると報じ，こう書いている。この問題については「我々外国にいるドイツ人は理論的に考察しがちだが，ここ

イタリアでは非常に実践的なセンスを示す。ドイツ社会主義者間の対立はものの見方にあったが，イタリア人の対立は活動の仕方でもめた。」その理由として，対政府権力の「戦術問題」があることはミヘルスも指摘している。SPDでは，現在であれ将来であれ政府を支持するか否かなど問題にもならない。「政府は一貫して超反動であり」将来も変わる見込みが無いからである。イタリアのジョリッティ体制とドイツ・ヴィルヘルム体制の相違である。従って階級間の「同盟」問題が当然重要となる。イーモラでは「ブルジョア急進派との同盟」を志向する「寛容な潮流」が勝利したのに，ババリアのミュンヘンでは他党との一切の同盟を全く不可能にするような条件を付したベーベルの動議が圧倒的多数で承認された。この「過剰の独立性」路線は「危険このうえない」とミヘルスは見なしている。何故なら，分解的で遠心的だから，と。がすぐにそれが逆であることがわかるとミヘルスは認めている。「理論的」には別々でも，「実践的」には，改良派のボノーミとベーベルはほとんど同じ内容を示しているからである。結局SPDとPSIとは「驚くほどの類似性」を有しているのである。両党大会とも「党の団結」を確認して終わった。ミヘルスによれば団結こそ「プロレタリアート自身の力であり，戦闘性であり，そして未来である」。両党にくらべれば，フランスの友党では「潮流の間の闘争が激しく，ために共同行動はほとんど不可能となる」と，この時点でのミヘルスがフランス社会主義にさほど知識も関心も有していないことをかいまみせてくれる。そもそも，青年ミヘルスの政治思想が明確になるのはもっと後のこと，と考えた方が至当である。もっとも，この「プロレタリアートの力」がこの段階のキーワードと言えるかも知れない。

「イーモラにおけるイタリア社会党大会９月10日」(N.20) によると，ザナルディッリ・ジョリッティ体制の政策転換は，社会党の体制内化を目論むものであった。それは二重の相対立する意義を持つ，とミヘルスは考える。即ち，一方で党は運動の自由を得，プロパガンダと組織化で

地歩を固めることが出来るのだが，他方，ラブリオーラによれば，党が警察の役割を引受けることも意味する。何故なら党は経済闘争に重要性を移すことを通じて，「プロレタリアートの運動を監視」することになるからである。

この記事ではトゥラーティとその仲間が比較的高い評価を得ていることに気がつく。トゥラーティの編集する“La Critica Sociale”（ミラノ）はこの派の「最も良く定式化された表現とその最も攻撃的な表現」であるとミヘルスは評している。それと対照的に，革命派については，グループというよりは，「知的個人主義」と呼ぶべき特徴を有している。この派は「質的」に優れたインテリ，従ってイタリアにとっても貴重なインテリを多く集めていることを認めている。

最後に，ミヘルスは先の報告と異なり，この大会は「非妥協派の敗北で終わった，といって，妥協派が勝利したわけでもない」と，注目すべきコメントをつけている。その理由は，ボノーミの動議では，階級闘争と集産主義のプロパガンダが強調されているからである。事実，先取りして言えば左派の巻き返しはすぐに始まるであろう。

ミヘルスは自分の感想の中で，「党の戦術の決議はもっとフェッリ色が強く出てもよかった――といって，非妥協派の完勝も同じく好ましいものではなかっただろうが」と述べている。繰り返して言うが，ミヘルスの政治姿勢は未だ漠然として不明瞭なのである。

ところで最近のミヘルス研究で欠かせない資料にトリーノのエイナウディ財団の所有する，ミヘルス宛の手紙がある。それは当代の錚々たる人物――社会主義者，政治家，知識人――からのもので，コスモポリタン・ミヘルスの「情報と文化的影響の国際的な伝播の決定的な継ぎ手」[(11)]としての役割を浮き彫りにしてくれる。フェッラーリスはそこにあるカウツキーの手紙を通してみたミヘルス像を研究し，従来見過ごされてきた側面に光を当てている。それによると，二人の関係は1901年12月から1914年6月まで続いた。家族ぐるみの付き合いであった。最初のアプロー

チはミヘルスからのもので，若いミヘルスがカウツキーの編集する雑誌“Die Neue Zeit”に寄稿を申しいれたのである。カウツキーはこの26歳の無名の若者の希望をすぐには受け入れなかったが，それはすぐ好転する。カウツキーがこの無名のミヘルスを「親愛なる同志」と呼ぶようになったきっかけこそ，上に紹介した“Vorwärts”紙に載ったミヘルスのPSIのイーモラ大会に関する報告記事であった。そして，カウツキーとの交際と文通はその後のミヘルスの思想方向を決定するうえで大きな役割を果たすことになる。

2. ミヘルスのイタリア事情，特に社会主義・労働運動に関する情勢報告では，この社会党イーモラ大会のものの他にいくつかある。それは成人男性プロレタリアート以外の労働者，また，都市の大工場で働く労働者ではない労働者（特に農業労働者）の労働条件と生活状態の報告である。前章でも述べたように，女性と子供に対するミヘルスの眼差しは優しく暖かい。

「子供のストライキ」(N.23) という短い文章は，それをよく示している。それは「ほんの一，二週間前，ミラノは一つの社会的，経済的闘争を経験した。それは多くの未熟な理念にも係わらず，広範な人民諸階層の社会的成熟における進展のまさに輝かしい証拠を提供した」という評価で始まる。ロンバルディアの方言で le pascinine「おちびちゃん」と呼ばれた14才位の少女たちで，主に仕立ての見習いや使い走りの仕事をする彼女たちがストを宣言し，デモを行ったのである。彼女たちは，親方の暴力，低賃金，労働時間，土日曜日の不払い労働，セクハラに抗議し，人間的な扱いと誇りを求めて立ち上がったのである。運動は拡大し，いくらかの待遇改善をかち取って終息した。ミヘルスは総括する。「このささやかな生活のための子供たちの戦いによって，自ら近代的と感じている大都市の子供たちの生存とその魂に鋭い光を投げ掛け，より一層の調査をうながすようになる一連の事実が明らかになった」と。

ミヘルスの批判は家内工業での労働が子供の魂に及ぼす悪影響にもふれていた。十代の子供たちが金儲けにのみ関心をもつことは悲劇的である，と。

一方で，ここで明らかになったミラノ資本主義の矛盾を指摘する。つまり，「おちびさん」たちのストは，「一つのプロレタリアートのもう一つのプロレタリアートへの戦い」だということ，即ち，女親方も実はプロレタリアートに属するという事実である。しかし，この運動が「模範的な連帯感」のもとに展開されたことは，「子供たちの社会的意識の目覚め」を示すと積極的に評価している。ともあれ，ミヘルスは大都市の資本主義の矛盾が，非人間的なしわ寄せとして集中する弱者の存在を問題にしたということは銘記に値しよう。

イタリアの農村社会主義の研究ではミヘルスが先駆者であることはあまり知られていない。「イタリアの女性農業労働者組織の綱領」（N.17.ドイツ語）と「イタリアの農村社会主義」（N.30.ドイツ語）の二論文はその意味で興味深い。前者は「もし，まさに最も恥知らずな搾取のことを話すとしたら，それはイタリアの農業労働者，就中女性労働者がこの前まで置かれていた状況にこそあてはまる」という文章で始まる。（N.17,S.159-160）イーモラの党大会でデモンストレーション状況が美しく描かれたモリネッラの女性たちのことが思い起こされる。特にポー川流域の稲作女性労働者は「白い奴隷」とすら呼ばれている。しかも彼女たちの意識は低い。というのも「彼女たちは，少なくとも飢え死にしない程度に食べ，教会のお勤めが果たせるほどに自由時間があれば，それで人生の幸福とする」から。従って，同じ女性でも都市と農村では異なり，対立さえすることもある。

しかし，近年「農村社会主義」の大波が女性を捉え，その状況に変化が生まれた。社会主義は新しい「希望と理想」をもたらしたのである。「農村での女性社会主義」は比較的豊かなボローニャやマントヴァで強いと言われている。ここでミヘルスは，ある女性労働者の組織の綱領の

一項を「素朴な心情に訴えて感動的」であると賞賛している。それにはこう書いてある。「メンバーは誰を愛しようともかまわないが，ふしだらで不誠実であることは禁じられている。というのも，女性は男性の同僚であるべきだからである。女性はその愛情のすべてをかけて家族の道徳的・社会的改良につとめなければならない。何故なら家族は心の故郷であり，その守護神はやはり女性だからである。妻であれ姉妹であれ，女性はいつも，人生の優しさ，愛情の甘味さ，不幸の時の慰めであり，未来への導き手である。」今日のフェミニズムの立場から見れば何ともブルジョア的と弾劾されようが，当時のミヘルスの女性観と家族観が伺える。社会主義への改宗とともに捨てざるを得なかったブルジョア的な自己の家族への哀惜の投影なのかも知れない。

もう一つの論文は重要である。

イタリアもドイツと同様，長い間農村は保守主義の温床であった。しかしイタリアではこの数年の間に社会主義が都市から農村へと浸透してきたのである。その背景には，古い家父長制と世襲的伝統的な関係そして土地制度が変わり，小農民が没落し自作農が小作化したことがある。農民の階層分化が進み，とりわけ農業労働力の半分をなすといわれる日雇い労働者（ブラッチャンティ）の存在がもっとも重要となった。加えて，女性と子供も田植え仕事で酷使された。そして彼らは，「シベリアの高山での厳しく辛い労働も」与えないほどの「恐ろしい破滅」を若い肉体にもたらした，とミヘルスは述べている。

しかし農村社会主義の組織化は「道徳的にも経済的にも優れた地区」で始まった。ここでミヘルスは二つの相いれない傾向を評価している。先ず，彼はフェッリによる1902年農村闘争の社会主義者煽動説批判を「無条件に正しい」と擁護している。フェッリは「一つの発展は煽動家が即座につくり出すことはできない」と主張した。他方でミヘルスは，社会主義は農民運動を「指導」しただけではなく，「合法的な方向」へと導きもした，と肯定的な評価をしている。これは，前にも述べたよう

に，ラブリオーラが党による労働組合の監視として批判していたところであった。

1902年も女性問題に関して多く書いている。そしてテーマも必ずしも女性労働者に限らない。「女性と知性」（N.12,ドイツ語）では，リリーブラウンも含めて当代の女性問題関連文献の無内容さを非難しながら，例外的に推薦に値するものとしてオダ・レルダの『女性と知性』を取り上げ書評を書いている。オダ・レルダは女性問題を「経済的側面」と「知的側面」とに区別し，前者の本源性を指摘している。そのうえで，「女性問題は世界の問題の一部でしかない。もし，文化発展の必要があり，望ましいとするなら，女性も無条件にそれに参加し，一層発展せねばならない」と主張する。他方で，女性軽視などの偏見が批判され，ロンブローゾも槍玉にあげられている。さらに，社会主義者オダによるブルジョア的欺瞞の批判が共感をもって紹介されている。「後の結婚の時の楽しみのために，娘に処女性を求めることが不道徳であると同様に，後の凡夫が誇らし気に自分の方が妻よりも賢いと言えるように女性の精神的な発達の抑制を求めることも全く不道徳的である。」

これら偏見と欺瞞を打破する方法としてオダは二つあげる。つまり知的教育と社会活動への参加である。ベーベル流の社会主義革命がすべてを解決するという幻想はここでは見られない。

女性の社会参加と労働については，「独身女性と職業婦人の問題―ドイツの状態」（N.24,イタリア語）が興味深い。ミヘルスはこの問題の階級性を先ず指摘する。そもそもこのカテゴリー自体はブルジョアジーの女性にのみ妥当する，というのである。何故なら，「プロレタリアートの独身女性はほとんど存在しないから。プロレタリアートの娘はほとんど必ず結婚する。しかし，未婚のままでいる女性の大多数は娼婦である。この資本主義体制の恥部である売春はプロレタリアートの独身女性の問題である。」ベーベルを彷彿させる筆致で弾劾されている。しかも，この結婚も「冷たい結婚，打算の結婚」である。恋愛結婚はただの夢で

しかない，と。

政治的には「女性の参政権」問題がある。(N.31,ドイツ語) イタリアで事実上男子普通選挙制度が導入されるのは10年後の1912年のことであるが，すでにこの時点でミヘルスは婦人参政権を「現代最も重要な理論的問題」であると断言している。先ず，「突然選挙権を与えることの危険性」というそれへの反対意見が吟味される。つまり，現実のドイツ人女性は教育水準が低く，「反動的な意見」に染まっており，せいぜい「女性への参政権拡張は保守党に有利なだけ」という消極的見解である。ミヘルスもそれを知らないわけではないと断っている。しかし女性参政権は「端的に正義の要請であり，熱望の対象である」と説く。事実としての女性の保守性はいうまでもなく「女性の先天的属性」ではなく，教育と経済的地位による。そしてミヘルスは自己の理想を高唱する。「私に関しては，女性に選挙権を認めることは単に有益なだけではなく，民主的目標の達成にとって全く必要であると信じている。今日すぐにでもそうすべきである。」続けて，再び総論賛成各論反対のような「理論的には望ましいが，実践的には危険とみなされる改革」という論法こそが問題だとする。解放すべき階級，人種，性が「成熟していない」と考える人たちは，成熟させるために何かするかといえば，「一般に何もしないのだ」と，そこに見られる欺瞞と偽善を喝破する。女性の参政権は「大衆の民主化」に貢献する。最後にミヘルスは繰り返して，「女性の選挙権は，今では近代の世界観の目的にとって最も有益なことである。それが無ければ女性の解放という夢は実現できない」と力説する。若い情熱と理想に燃えた青年ミヘルス像が浮かんでくる文章である。ここでは「大衆の民主化」という観念に注目しておこう。というのも，後に触れるように，「大衆」は1902年のミヘルス思想の隅の首石をなしているからである。

3. この年の著作には社会主義の理論とその歴史に関するものが多い。

青年ミヘルスは社会主義運動に直接参加する一方でアカデミズム界への希望をも保持していた。この年彼はマールブルク大学に歴史学教授資格取得のための論文を提出した。それは二つの論文としてDokumente des Sozialismus に発表された。「1848年革命のフランスの社会民主主義の綱領」（N．6）は，「社会主義的世界観を受け入れた」と称するルイ・ブランの文書を穏健な共和主義者も支持したのは何故かという問題を扱っている。「ルイ14世の宮廷における共産主義的陰謀」（N.28）と題する二つの論文は，貴族出身のフェヌロンの「共産主義的陰謀」を論じたものである。といっても，ルイ14世の孫ブルゴーニュ公の師伝に任ぜられたフェヌロンが教材用に著した有名な「テレマックの冒険」の中にある「共産主義的な国家理念」を論じたもの。そのユートピアは「絶対主義的に」植民された「強制農民」による「農業共産主義」で，それは「強権による幸福」を特徴としている。つまり，人民自身の自律的な共同体としての共産主義ではない。ミヘルスは，しかし，この「封建的で教権的な政治理念」を公表したフェヌロンの勇気を讃えている。

「正規労働日のためのP．ルルーの演説。1848年革命からのメモ」（N.11）は同じ1848年革命時のフランスの社会主義者P．ルルー（1797－1871）の演説をとりあげている。

ところで青年ミヘルスは何故1848年革命に関心をよせたのだろうか。ブルジョア革命の徹底化としての社会主義革命という，遅れたドイツに相応しいと思える変革路線がミヘルスを促したのかもしれない。ルルーの言葉を借りて言えば，「我々の祖父たちの不滅のモットーの輝かしい言葉，自由，平等，友愛が文字通り実現されている社会」を，国家でも議会でもなく国民自身が追求すること，を眼目とする社会主義である。さらにしばしばミヘルスに指摘される主意主義との関連で見ると，次のルルーの考え方は興味深い。「政治体の法則は現存社会の解体を必然づけている。といっても，この法則は絶対的なのではない。それが絶対的なのは，我々が盲目で無知だからである。従って，法則は存在し，それ

は不易であるというのは誤った学問に相応しい。というのも，法則は我々がそれに対策を講じようとしない限りでのみ不易である，というのが正しい学問に相応しいからである。」(N.11,S.351)

「フランソワ・ヴィダルとルクセンブルク宮殿における労働委員会」(N.9) 論文で，ミヘルスは「国家のみがプロレタリアートの正当な要求を充たすことができるという思想」から出発し，全労働者の同一賃金を保障するルイ・ブランの「労働組織計画」をめぐる議論を取り上げた。ミヘルスはそれを「国家社会主義」とよんでいる。主に自由主義経済学者のブラン批判に反論したヴィダルを紹介したものである。

4. ナショナリズム一般とイタリア・ナショナリズムへの肩入れを示す論文が初めて発表されたのもこの年1902年である。ナショナリズムはミヘルスの生涯のテーマであり名著『愛国主義』(1929) へと結実していく。まず「オーストリアの未回収地」(N.29) は，インスブルック大学におけるイタリア人教授排斥運動をきっかけに，ドイツ語雑誌『政治人類学——諸民族の社会的精神的生活のための月刊誌』に書かれたもので，初めにオーストリアの未回収地におけるイタリア人の窮状を指摘している。といって経済レベルの窮状ではない。物質的にはむしろ恵まれているからである。しかし，「偉大な文化民族に対するひどく不名誉な扱いは多くの物質的利害で償われるものではない」と精神的問題であることを主張する。「人間の幸福と民族の幸福はほどほどの物質的状況によっては保障されない」，と。「民族同胞との連帯感」が重要である。(S.717) といって，ここでミヘルスは一方的にイタリア・サイドに与するのではない。ナショナリズム一般の次元でも問題を見ている。即ち，ポーランド，エルザス，デーンのドイツ人も同様である，と。しかし，イタリア人に「同情を禁じえない」のは，本国イタリア人との関係も微妙だからである。つまり，本国からは「この世での権勢と栄誉をすべて剥奪された」人民として，主人を十字架に掛けた「ユダヤ人」のように

嫌われている，と。また同じ境遇にあるトリエステとトレントの間でも必ずしも連帯が成り立たない。最後にミヘルスはドイツ人に訴える。イタリア人の要求でドイツ人に何か脅威になるものは無い，と。「トレントは全くイタリア人の土地であり，トリエステはスラヴ人との民族角逐があるだけだから。従ってイタリア人に脅かされるのはせいぜい，いわゆる「オーストリア思想」であり，それすら既にビスマルクが断固としてその存在を否定したところである。」(S.724)

「ナショナリズム，国民意識，インターナショナリズム」(N.18ドイツ語）は問題をより抽象的レベルで扱っている重要な論文である。ミヘルスはここでこれら「三つの異なる心的態度」の峻別を要求する。というのも前二者はしばしば混同されているから，という。ナショナリズムは「自分の民族性を断固として，可能な限り支配民族にしようとする努力」,「頂点まで追求された愛国主義」と定義する。(S.107）英語でジンゴーイズム，フランス語でショーヴィニズム，ドイツ語でパトリオティスムスと呼ぶ。「他のものは一切尊重しないという点にあらわされる。刺激され易いが，刺激するのも容易である。」さて，これは国によって現れ方が異なる。英仏では，それが「民衆」に向いているかぎりでは無害である。しかし，ドイツ，ロシア，ハンガリーでは国境内に住む外国人に向かう時,「一切の倫理的契機」を犠牲にして危険なものとなる。ミヘルスの反プロイセン主義は第一章でも触れておいたが，ここでも繰り返しドイツ人はナショナリストであり,「その目的は「同化」，その本質は思い上がりと無知，その武器は過酷さと敵意――それは容易に冷酷さに転化する――である」と手厳しく批判指弾される。(S.108)

逆にイタリアではナショナリズムに転化しない例外的な国民意識が優勢である，と好意的に評価される。それは「全く健全」である。征服国家は国民意識を否定し,「国家意識」をそれに代えて据えようとする。そして，覇権的な民族はこの国家意識を自らの国民意識と同一視する。この例がドイツである。

第三のインターナショナリズムは，国民意識とは良く融合し得るが，ナショナリズムとは両立しない，とされる。コスモポリタンのミヘルスは，インターナショナリズムによるナショナリズムの抑制を求める。「ナショナリズムは単に他民族に対して自国の民族性を押しつけ，とりわけ自己の種の維持のためだけに国民意識を否定しようとするのに対し，インターナショナリズムは全民族の間に存在する大きな関係に注目し，純粋に民族的な価値より上に，もうひとつの，民族を越えた価値を認める。」そして，「インターナショナリズムは人類の共同生活の最高の形態を意味する」と宣言しているのである。(S.109)

最後にミヘルスは，出たばかりのグンプロヴィッツの著作『19世紀におけるナショナリズムとインターナショナリズム』を紹介しつつ，ナショナリズムの国のオーストリアとインターナショナリズムの国のスイスの巧みな対比に触れている。スイスでは「その住人の言語と文化が異なるにも係わらず，断固たるインターナショナリズムが貫徹している」，と。しかし，グンプロヴィッツにも見られる，反ロシア帝国主義については，一定の保留をしている。つまり，当時のヨーロッパ人を捉えた反ロシア感情，ヨーロッパの社会状態の改良はロシア帝国主義の崩壊に懸かっている，という見解は誤りである，と。「私は，ロシアの帝国主義が，フランスやドイツなどの強国の帝国主義よりも一層公共の危険であるとは信じない」と，公平なスタンスを披露している。ともあれ，グンプロヴィッツの本は推奨に値する。皮肉まじりに，ミヘルスは，「自由な思想を遠慮無しに表明することに，ドイツでそもそも感受性を有する人」に推奨すると，語り終えている。(S.110)

5. 青年ミヘルスにとって，政治的近代化のおくれたドイツが問題意識の枠組みを形成していた。「ドイツの高等学校における歴史学の無前提性」(N.7ドイツ語) はいわゆる歴史学の価値自由の問題を扱ったものだが，同時にドイツの大学における学問の自由の不在が暴露されてい

る。ドイツでは民主主義的なカトリックさえ「科学の無条件性」を口にするが，歴史教育は多かれ少なかれ「党派的な視点」――国民自由党の視点――と「教会の偏見」と「民族的偏見」によって支配されているのが実情であると断ぜられる。この論文の中でミヘルスは歴史学の方法としてトライチュケの主観性，ランケの客観性，ベルンハイムの無前提性を対比しながら，「宮廷に歴史の源を求め，宮廷の人間を描く」ランケの歴史に対して，「〈人民〉とその苦悩――というのもこれはずっと昔から存在するのだから――」を排除しない歴史を歓迎している。比較のうえでは「社会主義的世界観」の方が「無前提の研究」に相応しいと考えている。すくなくとも民族の偏見と教会の偏見を免れているからである。ともあれ，「現存の国家の見方を基礎としない世界観」を排除するドイツの「国立」大学では，「教育の自由」と「学者の共和国」などは美辞麗句でしかない，とミヘルスは弾劾する。

ミヘルスはこれと対照するかのように「イタリアにおける劇場改革」（N.16）をドイツ人に紹介している。まず，資本主義的に腐敗していない芸術至上主義的な劇場建設運動と，その活字版といえるトリーノの雑誌『ラ・コメディア』――前年ミヘルスはこの雑誌に二篇の論稿を寄稿している――について述べる。後者はイタリアの民主主義的ニュアンスをもった立脚点から，「芸術と道徳」の戦いを行った。具体的にいうと，大衆の「魂」と趣味を毒しているフランス製の不道徳な芝居 pochades に対する戦いである。もう一つの労働者劇場は労働者自身の手と金による演劇と劇場で，ミヘルスはそれを「共産主義的芸術施設」と呼んでいる。ともかく，イタリアの全ての国民生活で劇場はドイツ以上に大きな役割を果たしている。特に「下層の民衆階級」の教育と娯楽にとってとりわけ重要なのである。ミヘルスは1901年の最初期の作品から始めて，劇場と戯曲の社会的機能への関心を生涯失うことは無いであろう。それが大衆教育と「大衆の民主化」に大きく係わるからである。

6. さて最後に取り上げる「〈大衆〉概念とその使命」(N.33イタリア語) は，ミヘルス自身の政治思想の特徴を示唆してくれる重要な論文である。というのも「知識人と大衆」関係はミヘルスの中心問題だったからである。(13)

先ずミヘルスは大衆がカテゴリーとしては消極的なイメージを有することを述べる。つまり，知的，倫理的，文化的共通性ではなく，身体と生活のレベルでの共通性をもつ集合体を指す，と。「言葉としての大衆」は，特徴としてはプロレタリアートと同じであり，「無教養と無産の大多数」，時には，「下層民，平民，賤民」と定義される。しかし，これらはすべてブルジョアジーの言葉使いであるとミヘルスは主張する。要するに，大衆概念は曖昧であり，その言葉を用いる階層によってその内容も変わるのである。

さて，ミヘルス自身の大衆概念は消極的に，つまり「大衆に属さない要素」を際立たせることで定義される。「大衆の大部分に持続的に影響を及ぼす個人以外の人間，精確には個性を有しない人間一般」である。しかし，これとてまだ断片的であることをミヘルスは認め，次に，「文化的使命」の違いから説明する。個性を有する個人は「人類の知的な進歩の担い手」であり，大衆は「その道徳的な進歩の担い手」とされる。

ミッツマンはこの大衆観から大衆を理想化する青年ミヘルス像を描き出している。「かくして，ミヘルスの理想主義・観念論的社会哲学の前提——これは，彼の社会民主党批判の基盤なのだが——が浮上し始める。

人間の集団とその思考過程には理想的な本性が内在している。この本性は，概ね健全で道徳的である。しかし，厳しい物質的なブルジョア社会の脈絡の中ではこの内在的な本性は壊滅，腐敗，破壊されている。こうしてミヘルスのブルジョア社会との戦いは，非道徳的な物質的腐敗に対する道徳的理想——これはぼんやりとした存在論的な構造すら有している——のための戦いとなる。そうすると，ミヘルスが大衆を社会道徳の歴史的体現として見ても驚くにあたらない。(14)」

このミッツマンの解釈をフェッラーリスは，「歴史的文化的脈絡」を度外視していると批判する。ミヘルス自身も認めているようにこの大衆観はイタリアの社会学者で犯罪学者，そしてエンリーコ・フェッリの学派に属するスキピオ・シゲーレ（1868－1913）の示唆に負うところ大である。[15]「大衆の使命」というタイトルにも係わらず，実際にここで強調されているのは知的エリートの使命であると言っても過言ではない。その点でも「人民に対して権利を有する唯一のかたちの貴族制である，知性のエリートの役割」を第一の役割と肯定しているシゲーレと同じスタンスなのである。[16]

フェッラーリスは，以上の解釈の下に，青年ミヘルスにおける「知識人の貴族主義的エリート主義」を剔抉するのである。[17]

加えて，青年ミヘルスが一種の進歩史観に与していることにも気がつく。と言っても，「発展はなだらかに進行する」のが「法則」である，と述べているがこれはミヘルスのマルクス主義解釈へと連なる。

「知性の領域ではすべてが卓越した個人によってなされる」，「本来の大衆は単に全く受け身である」と主張しているが，青年ミヘルスの貴族主義的な色彩を反映している。

知的な進歩についても，大衆は「受動的な下位の役割」しか果たさないのだが，「道徳的な進歩」についてはそうではないとミヘルスは語る。ここで，この「集合的道徳」へのミヘルスの関心が女性の持つイデオロギーと女性に関するイデオロギーに対する関心によって惹起されたと考えることもできる。またそれはプロレタリアートの階級意識への関心へと発展していく。[18]というのもここでエリートが大衆の（道徳）意識に影響を及ぼすことは可能か，階級意識はどのように形成されるのかというレーニン的問題が扱われているからである。

ここで再びフェッラーリスによるミッツマン批判にふれておきたい。というのもここでミヘルスとカウツキーの思想的関係が分かるからである。ミッツマンは「もしミヘルスが社会主義意識を階級の純粋な意識と

対立すると見ているというなら，それが問題の核心に近い」，ミヘルスによれば「社会主義意識，つまり人間の戦いの最終目的の意識にたっするためには，プロレタリアートを裏切ったブルジョア・インテリ（ミヘルス自身のように）の助けを得ねばならない」とのべているが，フェッラーリスはこれを正しいと支持している。

しかし，「この社会主義運動の指導部に与えられた決定的な役割」がミヘルスの「理想主義・観念論」の独自性――これ故にミヘルスは，機械的なマルクス主義のSPDの見地から離れた――であると考えるミッツマンは「許し難い歴史的誤り」をおかしているとフェッラーリスは批判する。その正統派の見地とは，ミッツマンによれば，「普遍的な最終目的――プロレタリアートも含めて全階級の消滅――を経済闘争から直接由来すると考える」，いわゆる経済決定論である。

しかし，まさにこの時代の（1901－02）カウツキーは，理論的に厳格な立場に立っていた。“Die Neue Zeit”のある論文で彼はこう説いている。「社会主義と階級闘争は相並んで生まれてくる。それは異なった前提のもとに生まれてくる。現代の社会主義意識は深い科学的認識を基礎にしない限り生まれ得ない。……科学を有する人はプロレタリアートではなくブルジョア・インテリである。……従って，社会主義意識とは外部からプロレタリアートの階級闘争に持ち込まれた意識であり，自生的に生ずるようなものではない。[19]」こういう理論化では，同年に発表された『何をなすべきか』におけるレーニンの「職業革命家」インテリ論と，カウツキーないしミヘルスとは一致する。リプセットも，「近年明らかにされたように，〈大衆の無能〉に関するミヘルスの誇張は，党組織の基本的な文献『何をなすべきか』でのレーニンの分析と大部分一致する」と述べている。[20]

しかし，私見では，リプセットのようにレーニンの階級意識外部注入論と「全面的に一致する」とまでは言えない。何故なら，「それを受け入れるのに，まだ熟していない時に集合体［大衆のこと］に進歩的な道

徳を押しつけることがどれほど不可能か」を示したのが1848年の2月革命であったとされるからである。もっとも，少数者の大衆に対するイデオロギー的影響の可能性という問題意識で一致していることは明らかである。

ともあれ，青年ミヘルスは未だ多くの傾向（時に理論的に相いれない）を共存させているというのが実情であろう。「改良主義的社会主義とアカデミズムへの野望，政治的プログラマティズムと憤激した学問的主知主義[21]」，一方でカウツキーへの共鳴と他方でのイタリア社会主義の折衷主義とベルンシュタインの影響。それらは党組織の内部経験とマルクス主義との格闘とともに収斂していくであろう。

7．先にも述べたように，青年ミヘルスはベルンシュタインの雑誌に多くの書評を書いていた。それらは概ね好評だったようである[22]。ミヘルスが取り上げた著者の多くは，彼の言葉で言えば，「社会主義の大義を全身全霊で支持する，イデオロギーでは周知の大学教員の大集団」（N.15）に属している。イタリア社会主義における社会主義知識人の役割という青年ミヘルスの重要なテーマについては，彼がそれを肯定的にみていたことが分かる。労働評議会 Camera del Lavoro に関する本の書評でミヘルスは次のように書いている。「著者は，なるほど純粋に専門家の労働評議会へ非プロレタリアの分子が進入してくることに反対している。それは正しい。しかし，彼が党の議会フラクションにつらくあたって，それがほとんど教授と弁護士のみからなると非難したのは正しくない。私の考えに依れば，全く私心無くプロレタリアートの権利を擁護するブルジョア出身の知識人に対して，まさに著者の国ほど恩義を感じている国は他に無いのだから。」（N.17）

ラブリオーラとトゥラーティの著作も取上げられており，後者の才能は「率直に認めざるを得ない」，「学問的にも優れたマルキスト」であると高く評価している。（N.19,22）他方で，イタリアにベルンシュタイ

ン主義は必要無いとする左派に属するレルダの『社会主義とその戦術』の書評でミヘルスは,「党の勝利は,それの原則と一致している場合にのみ価値がある」と非妥協的なコメントも残している。(N.25)

ドイツとイタリアの比較の視点もミヘルス独自のものであった。ミヘルスはドイツには存在しない労働評議会を紹介して,それが「イタリアの経済生活では非常に大きな役割を果たしている」こと,「都市における社会主義の中心組織である」ことに触れている。(N.17) またドイツ社会主義の批判もなされている。そもそも,ドイツ人には「広範な大衆の生活への広い眼差しと愛情ある沈潜」が欠けているとし (N.28),クローチェの『史的唯物論とマルクス経済学』からは,次の言葉を引用している。「マルクス主義者たち,なかでもドイツのマルクス主義者たちは,マルクスの問題提起を恭しく,卑屈に受けとめ,一切批判をしない。自由の感覚と精神的な創造性を欠いている――この特徴は彼らの文章全体を貫いている。」(N.31)

フェッラーリスによればPSI「改良派」が,青年ミヘルスを魅了したのは,「未来の状態」を観想するのではなく,「手で触れられる成果」を目指すその実践的な性格のためである。(N.5論文参照)「我々ドイツ人は理論的考察に傾くのにたいして,イタリア人は優れた実践的センスを示す」と,先に取り上げた「二つの大会の間」記事 (N.22) でミヘルスは述べていた。

さて,“Dokumente”の書評では『宗教と社会主義』という本も取り上げられてるが,その中でミヘルスは,宗教は,それが経済的争点にまで進出していかない限り,社会主義との間に「公然たる対立関係が存在するには及ばない」という著者の意見について,「私の考えでも全く健全な考えである」と同意を表している。青年ミヘルスの頭脳はまだ柔軟であったと言うべきか。(N.47)

イタリア社会主義の研究者としてのミヘルスは,当初から農村社会主義に関心を,しかもイタリア人の農業問題専門家を批判するほどに強い

関心を寄せていた。また各国の社会主義政党の農業問題への対応を研究することは「興味深く，またためになる」(N.50) と語っている。たとえば，ガッティは『農業と社会主義』の中で，イタリア農民の政治的アパシーを指弾している。イギリスやドイツに比べて専業農民出身の国会議員が少ないというのが理由である。これに対してミヘルスは，「間違った方法」だと批判している。「まるで，ドイツの東部で選ばれた貴族出身の農業経営者が農民の代表であり，その全利益を代表しているかのようである。まるで，農民と農業労働者が，対立する階級のメンバーを代表として送り出すことが彼らの政治的成熟の印であるかのようである」と。プロレタリアートの代表としての社会主義インテリについてはミヘルスは肯定的であった。さらに先取りしていえば，いわば党内出世したプロレタリアートがブルジョア化していくというのが主著『政党の社会学』のメインテーマであった。

ガッティによれば，イタリアの農村では小，中規模の土地所有者が「まじめに社会主義的心情」を持つのに対し，同じ地区の「本来の農業労働者は社会主義について何も知ろうとしない。」ガッティの結論は，小土地所有とある程度の豊かさの方が，最下層のプロレタリアートよりも，社会主義に接近しやすい，というものであった。ミヘルスは，「全く例外的な場合にのみ，妥当する」と反論している。政党支持者の階層分析はすぐに行われるであろう。

青年ミヘルスはベルンシュタインの雑誌だけでなく，カウツキーの編集する雑誌“Die Neue Zeit”にもいくつかの書評を書いている。先にも触れたように，1902年にミヘルスとカウツキーは家族ぐるみの付き合いをするようになった。11月に初めて個人的に会っている。フェッラーリスは，この二人の「うちとけた関係」は，ミヘルスとウエーバーの関係に比肩できると評している。[23] 付け加えれば，この二人とミヘルスの交友が第一次大戦頃に決裂する点でも共通である。この年には四編の書評を書いている。本誌への寄稿は1907年まで断続的になされた。[24]

A．ノレンギ『現代の犯罪と未来の犯罪』の書評はミヘルスとロンブローゾの思想的関係を示唆してくれる。この本は，「社会的犯罪者」——資本主義経済の故に犯罪へと追いやられるプロレタリアート——をロンブローゾの視点を加味して論じたものであるが，ここでミヘルスは「実証的な倫理的価値」の立場を表明している。[25] というのも，ノレンギは「為替偽造の方が強盗殺人よりも倫理的に上位と考えているようだが，それは正しいと思う」と賛意を表明しているからである。つまり，「無血の犯罪はより高級で，既に進化した犯罪を意味する。」ミヘルスはここで「道徳」と「社会倫理」を峻別して，為替偽造は「道徳的にではなく，犯罪の進化並びに社会倫理の進化という尺度に照らして」みると，「ただのおいはぎ」よりは「高い段階」にある，と語っている。ロンブローゾの実証主義的犯罪学の影響はここでも明白である。[26]

この“Die Neue Zeit”に載ったミヘルスの書評に対しカウツキーは，犯罪のヒエラルヒーをつくることは無意味である，と手紙でミヘルスに伝えた。そしてロンブローゾから離れるように勧告したが，結果的にミヘルスはそれに従わなかった。[27] ミヘルスは後にロンブローゾ評伝を書くことになるのだが，彼の影響は非常に早くから始まっていたことが分かる。[28]

この書評でミヘルスは注目すべき発言をしている。「社会主義社会は犯罪を限り無く少なくすると主張する時，この主張はいかなる場合でも証明されなければならない。ノレンギはそれに成功していない」と，残念がっているのである。「あらゆる対立の社会主義による解決という結論は十全には根拠づけられていない」という“Dokumente”（N.30）の文章にも符合する当時のミヘルスのマルクス主義と社会主義の理解の仕方を暗示している。他の二つの書評（N.20.21）で取り上げられたもののうち，一つは社会主義者A．ロヴェッリの戯曲『その後』で，それは「姦通」した妻を夫は自分で処罰することが道徳的に許されるか否か，という「重要な問題」をテーマとしている。ここでミヘルスはそれでも

殺すべきではないというモチーフに関連して，これは「イタリアの同志が，何人かのアナーキストと共和主義者の暴力による殺戮への傾向に対して，行わなければならない，全く人間的な戦いに対応している」，と積極的に解釈している。イタリア・フェミニズム研究の先駆者ミヘルスは同時に暴力革命に反対の立場に立っていたのかも知れない。

K．マメドーリ『離婚』は「人間の共同体は個人の人格的自由の所産」という立場から離婚の自由を要求したものだが，ミヘルスは「両性の経済的，法律的解放」が最も基本的であるとする著者の意見に賛成している。

以上が1902年に書かれたミヘルスの主な著作の概略であるが，結論として，26才の青年ミヘルスは広義の社会主義の立場に立っているとしても，その中での諸潮流に対して自己の思想的姿勢を確立しているとは未だ言えない。理想主義と実証主義が相並んでいる。しかし，大衆―エリート図式は既に萌芽的に確認できよう。その意味ではミヘルスの民主主義観の枠組みが形成されつつあるとは言えるかも知れない。しかし，翌1903年に決定的な「転換」が青年ミヘルスに生ずる。

注

（1）　本書は1979年に復刻された。サッバトゥッチが序文を書いている。G. Sabbatucci, Introduzione “Michels e il socialismo italiano”, Roberto Michels, *Movimento Socialista Italiano-Dagli inizi fino al 1911*, Il Poligono, Roma, 1979.

（2）　プロカッチ，豊下楢彦訳『イタリア人民の歴史』II，未来社，1984，174頁。

（3）　山崎功『イタリア社会運動史』淡路書房新社，1957年，100－101頁。

（4）　プロカッチ，前掲，207－208頁。

（5）　『イタリア社会主義運動の批判的歴史』1979年復刻版への G.Sabbatucci の序文「ミヘルスとイタリア社会主義」に引用された Andrialli G. A.（Critica Sociale, 1908, n.15, pp.237-8）の文章。同じ著者による同じタイトルの論文が *Roberto Michels: tra politica e socologia*, a cura di B.Furiozzi, 1984. にもあるが内容は別。ここで著名な人物の挨拶と

して問題にされているのは，次回のボローニャ大会でのことである。

(6) 拙訳「ドイツ社会主義におけるサンディカリズム的底流 (1903－1907)」，『神戸学院法学』第23巻第4号，1993年，90頁。

(7) 同拙訳「訳者前書き」参照。

(8) 山崎，前掲，167頁。

(9) ミヘルスの著作からの引用は "Opere di Roberto Michels", in *Studi in Memoria di Roberto Michels*, Annali della Facolta di Giurisprudenza, vol. XLIX-1937-Serie V-vol/XV, R.Universita degli Studi de Perugia," p.39-76 にある文献目録—1902年分は本稿末尾に掲載してある—の番号（と必要な場合は頁数）で本文中に略記する。

(10) 1902年には，事実，政府案と社会党案の妥協の産物として，婦人と子供の労働規制立法がなされた。プロカッチ，前掲，218頁。

(11) Pino Ferraris, "Ancora sul Michels Politico attraverso le lettere di K.Kautsky", in, *Quaderni dell Istituto di studi economici e sociali*, [della Facolta di Giurisprudenza di Camerino], 4/1985, p.49.

(12) Sabbatucci, *ibid.*, p.XIX)

(13) Ferraris, "Roberto Michels politico (1901-1907)", in, *Quaderni dell 'Istituto di studi economici e sociali*, [della Facolta di Giurisprudenza di Camerino] 1/1982, p.64.

(14) Mitzman, *Democracy and Estrangement. Three Sociologists of Imperial Germany* 1973, p.290-291.

(15) S.Sighele, "L' anima collettiva" (1902).

(16) Sighele, "L' intelligenza della folla".

(17) Ferraris, "Robert Michels politico (1901-1907)", p.64.

(18) ibid., p.66以下。

(19) ibid., nota 52.

(20) Lipset, "Introduction", in R.Michels, *Political Parties*, 1962, p.27.

(21) 青年ミヘルスにはアカデミズム「神話」が繰り返しとりつく。「大衆」論文でも「精神貴族的な大学教授」のことに触れている。

(22) 1902年9月の "Dokumente" には編集者（ベルンシュタイン）より「読者へ」と題してこう書かれている。「我々が社会主義の文献コーナーで当初から意図したように，ただの批評に限定せず，批判の余地をも認めたことは，我々の耳にはいってくる限りでは，読者から好意的にうけいれられた。」以下では，本稿の末尾にあげた "Dokumente" の号数で書評を指示する。

(23) Ferraris, "Ancora sul Michels politico attraverso le lettere di K.Kautsky", p.50.

(24) "Opere di Roberto Michels, in *Studi in Memoria di Roberto Michels*" のリストでは以下の通りである。

1. "Beitrag zum Problem der Moral", 1903, 21 Jg., Bd. I, N.15.
2. "Zur einer internationalen Wahlstatistik de sozialistischen Parteien", 1904, 22 Jg., Bd II, N.42.
3. "Der erste internationale Kongress zur Bekämpfung de Arbeitslosigkeit", 1907, 25 Jg., BD. I, N.14.

四編の書評は本稿末尾の「ミヘルス文献目録」Cにまとめてある。

(25) Ferraris, "Ancora sul Michels politico attraverso le lettere di K.Kautsky", p.50-51.

(26) 前世紀末のイタリアにおける実証主義についてはプロカッチ，前掲書，185頁を参照せよ。

(27) Ferraris, ibid, p.51.

(28) 拙訳「ロベルト・ミヘルスの同時代人論(3)—チェーザレ・ロンブローゾー」『神戸学院法学』第15巻第2号，1984年，参照。

ミヘルス文献目録

A.1902年 ("Opere di Roberto Michels, in *Studi in Memoria di Roberto Michels*")

6. "Das Programm der Sozialdemokraten Frankreichs am Vorabend der Revolution von 1848." *Dokumente des Sozialismus*, Bd. I, H.5, S.230-231.
7. "Die Voraussetzunglosigkeit der Geschichtwissenschaft auf deutschen Hochschulen." *Das freie Wort*, Frankfurter Halbmonatsschrift für Fortschritt auf allen Gebieten des geistigen Lebens, Jahrgang I, N.22, 1902, S.673-676.
8. "Deutsche Dichter auf italienischen Bühnen". *Der Lotse*-Hamburgische Wochenscrift für deutsche Kultur. Jahrgang II, Heft 22, S.689-693.
9. "Francois Vidal und Arbeitskommission des Luxembourg". *Dokumente des Sozialismus* Bd. I, H.6. S.261-267
10. "Die Arbeiterinnebewebung in Italien". *Die Frau* (Monatsschrift für das gesamte Frauenleben unserer Zeit), 9.Jg., Heft 6, S.328-36.
11. "Eine Rede von Pierre Leroux für den Normalarbeitstag. Ein Gedankblatt aus der Revolution von 1848." *Dokumente des Sozialismus* Bd.I, H.8, S.341-361.
12. "Das Weib und der Intellektualismus". *Dokumente Frauen*, Bd.VII,

N.4, S.104-114.
13. "Leonardo Bistolfi." *Südwestdeutsche Rundschau* -Halbmonatsschrift für deutsche Art und Kunst, 1902, 2. Jg., H.9, S.334-339.
14. "Ein rheinischer Poet." in *Südwestdeutsche Rundschau*, 1902, 2. Jg, H.9, S.361-363.
15. Nationalismus, Ntionalgefühl, Internationalimus". *Das freie Wort*, 2. Jahrgang, N.4, 1902, S.107-111.
16. "Theaterreformen in Italien". *Neue Deutsche Rundschau*, 1902, 1. Juni, S.665-672.
17. "Ein italienisches Landarbeierinnenprogramm". *Dokumente Frauen*, 1902, Bd.VII. N.6, S.159-66.
18. "Der Kampf um eine Arbeiterinnenschutzgesetzgebung in Italien." *Die Frau*, 9. Jg., H.9, S.513-18, 612-18.
19. "Der Kongress der italienischen socialistischen Partei (Imola)". *Vorwärts*, Berliner Volksblatt, Generalorgan der socialdemokratischen Partei Deutschlands, 19. Jahrgang, N.210,211,212,213,214.
20. "7. Kongresse der italienischen sozialdemokratischen Partei zu Imola". Schwäbische Tagwacht 1902, 22.Jg., N.214.
21. "Eindrücke vom Kongress der iralienischen socialistischen Partei in Imola". *Schwäbische Tagwacht*, 22.Jahrgang, N.226.
22. "Fra due congressi: Imola e Monaco". *Avanti!*, giornale socialista, anno VI, N.2097.
23. "Ein Kinderstreik". *Die Frau* Jg.,10, H.1.
24. "La questione dlella zitella e della donna professionista (sotto l'aspetto che essa ha in Germania)". *Unione Femminile*, anno II, N.19-20, P.144-146.
25. "Der Kampf um das Arbeiterinnenschutzgesetz in Italien." *Die Gleichheit*-Zeitschrift für die Intereese der Arbeiterinnen, 12. Jg., N.9, S.68
26. "Die Frauenbewebung in Italien". *Die Gleichheit*, 12.Jg., N.17, S. 130-1, N.19, S.149-50., N.22, S.171.
27. "Die erste internationale Ausstellung für moderns Kunstgewerbe in Turin." *Hessische Landeszeitung*, VII.Jg., N.258.
28. "Ein communistischer Entwurf am Hofe Ludwigs XIV." *Dokumente des Sozialismus*, Bd.II, H.14-15., S.92-95.
29. "Das unerlöste Italien in Oesterreich." *Politisch-Anthropologische Revue*-Monatsschrift für das soziale und geistige Leben der Völker,

1902, I.Jg., N.9, S.716-724.
30. "Die italienische Sozialismus auf dem Lande". *Das freie Wort*, II. Jahrgang, N.2. 1902.
31. "Fauenstimmrecht-schon heute eine Notwendigkeit." *Frauenbewegung*-Revue für die Interssen der Frauen, VIII.Jg., N.23, S.177-8.
32. "Der sozialistischen Frauen auf dem Kongress zu Imola. Eindrücke und Beobachtungen". *Die Frau*, 10.Jg., H.3, S.152-5.
33. "Begriff und Aaufgabe der Masse", *Das Freie Wort*, II.Jg., N.13.

B. E.Bernstein の "Documente des Socialismus, Hefte für Geschichte, Urkunden und Bibliographie des Socialismus" での書評 Recensione. 11～50 は Bibliografia degli scritti di Roberto Michels nel periodo 1900-1910 (a cura di Viviana Ravasi), in *Roberto Michels: Potere e Oligarchie*-Antologia 1900-1910 (a cura e con introduzione di Ettore A. Albertoni), 1989. の番号である。
11. Bonomi, Ivanoe e Veffani (rectius: Vezzani), Carlo: Il Movimento Proletario nel Mantovano, Vol.I n.6.S.247.
13. Dinale Ottavio: Diversità di tendenze o equivoco?, Vol.I, n.8, 337.
14. Fancello, dott, D.: La vita privilegio di classe, vol.I, n.8 337-338.
15. Lombardi Giovanni: Lo Stato, Saggio di Sociologia. vol.I, n.8, 338.
16. Lucci, Arnaldo: Giustizia Nuova, vol.I, n.8, 338.
17. Ciacchi, Eugenio: Cos'è la Camera del Lavoro? Biblioteca Educativa Sociale. 5. Auflage, vol.I, n.9, 381.
18. Ciccotti, Ettore: La guerra e la pace nel mondo antico, vol.I, n. 9, 381-382.
19. Labriola, Arturo: Ministero e Socialsmo. Risposta a Filipp Turati, vol.I, n.9, 382.
20. Lenzi, Dott. Orazio: La produzione nazionale alla stregua del tenor di vita del salariato, vol.I, n.9, 385.
21. Montemartini, Prof. Giovanni: La Leghe di Miglioramento fra i contadini nell' Oltrepò Pavese, vol.I, n.9, 383.
22. Turati, Filippo: Le Riforma urgenti del processo penale, vol.I, n.9, 385.
23. Angiolini, Alfredo: Cinquant' anni di Socialismo in Italia, vol.I, n.10, 433-434.

24. Bertelli, Giuseppe: Chi siamo e cosa vogliamo, Zweite vermehrte und verbesserte Auflage, vol.I, n.10, 434.
25. Lerda, Giovanni: Il Socialismo e la sua tattica, Zweite Auflage, vol.I, n.10 434-435.
26. Loria, Achille: Marx e la sua dottrina, Vol.I N.10 435.
27. Celli, Angelo, Cabrini, Angiolo, Chiesa, Pietro e Majno, Luigi: La difesa della vita (Per il lavoro delle donne e die fanciulli), vol.I n.11 482.
28. Ferrero, Gugliemo: Grandezza e decadenza di Roma, Vol II, vol. I n.11 482-483.
29. Lorenzoni, Giovanni: La Cooperazione agraria nella Germania moderna, I parte: Le varie forme della cooperazione agraria, vol. I n.11 483.
30. Ciccotti, Ettore: Quale dev' essere il nuovo indirizzo della politica estera?, vol.I n.12 529-530.
31. Croce, Benedetto: Materialismo storico ed economia marxistica, Saggi Critici, vol I n.12 530.
32. Ferri, Enrico: Il metodo rivoluzionario, vol.I n.12 530-532.
47. Bertesi, Alfredo: Socialismo e Religione, vol.II n.13 10.
48. Ciccotti, Francesco: Socialismo e Cooperativismo agricolo nell' Italia Meridionale, vol.II n.13 11.
49. Il Canzoniere dei Socialisti. Compilalazione di Maria Cabrini, vol.II n.13 12.
50. Gatti, Gerolamo: Agricoltura e Socialismo. Le nuove correnti dell' economia agricola. Biblioteca di Scienza Sociali e Politiche, vol.II nn.14-15, 62-64.

C. "Die Neue Zeit" での書評 (1902年)

N.12, 21 Jahrgang, 1. Band, 1902-1903.
Arold Norlenghi, "Delinquenza Presente und Delinquenza Futura."

N.19, 21 Jahrgang, 1. Band, 1902-1903.
G.B. Bianchi, "Primo Maggio".

N.20, 21 Jahrgang, 1. Band, 1902-1903.
Augusto, Novelli, "Dopo".

N.21, 21 Jahrgang, 1. Band, 1902-1903.
Wiera, "Il Divorzio".